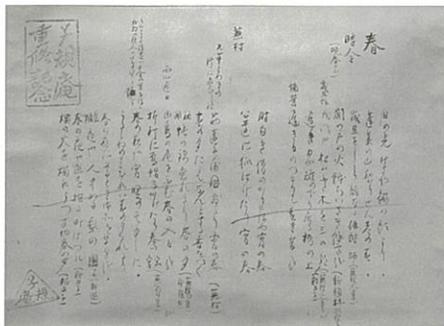


館蔵資料紹介 子規筆「俳家全集」稿「春時令」

上田一樹

坂の上の雲ミュージアム学芸員



【資料形状・寸法】

半紙軸装 一点
 全体：縦二四三mm × 横三六〇mm
 本紙：縦二四二mm × 横三三八mm

ており、子規が多く蕪村の句集や俳書を読み、つぶさに記録していったことがうかがえる。

また、本資料の左端には「子規庵重修記念」「子規庵」の印がある。「子規庵」は台東区根岸にある正岡家の借家で、子規の終の棲家となった。子規没後、門人たちは子規庵の土地家屋及びその遺物を保存するために資金を募り、その記念品として「子規居士筆 俳句分類原稿」が贈呈・頒布されている。寄附金の募集は明治四十四年と大正十三年に行われており、俳句分類の一環として記された本資料が、いずれかの時期の記念品となった可能性がある(寒川鼠骨著『子規庵要記』子規庵保存会編二〇〇二年三月発行 参照)。

さて、冒頭でも触れたように、明治という新しい時代に俳句の

本資料は、正岡子規が「俳家全集」という句集を編むために書いた草稿である。「俳家全集」とは、子規が室町時代から江戸時代までの俳句を人物ごとに選抜し、四季類題別に分類した句集で、後述する子規の「俳句分類」の一環として生み出されたものである。なお、浄書された「俳家全集」は国立国会図書館に収蔵されており、人物の没年順に五冊にわたって編まれている。

本資料に書かれているのは、与謝蕪村の春の時令(時候)の二十句。蕪村は江戸時代中期、京都を中心に活躍した画人・俳人であり、子規の俳句革新を語る上革新に挑んだ子規が、その端緒として取り組んだのは、古人の俳句を分類することであった。自身が「俳句分類」と名付けたこの研究作業は、子規が二十二歳のころに始められ、病床に在った晩年に至るまで十年近く続けられた。室町時代から江戸時代までの俳句を蒐集し、四季類題別等に細かく分類するこの研究を積み重ねること、子規は俳句の趣味と歴史を識り、新時代にふさわしい俳句の在り方を模索していった。

子規は明治三十年に発表した「俳句分類」という文章の中で、できる限り多くの俳句を蒐集したいと思っていること、この研究が完結するのは「余が力尽き身斃る、時」であり、自ら進んで完結させることはないと言っている。俳句分類は子規生涯の

で欠かせない人物である。子規は二十五歳のころから、当時は画人として知られていた蕪村の俳句に着目し、仲間と共に「蕪村句集」を探し求めてその俳句を熱心に研究した。子規は新聞「日本」や俳句雑誌「ほととぎす」に、「俳人蕪村」をはじめとする蕪村についての俳論を発表したほか、明治三十年十二月からは「蕪村忌」の集いを開催、さらに翌年から「蕪村句集」の輪講会を行い、これらは子規の死後も門人たちによって続けられた。

改めて資料を見てみると、俳句と共に「蕪村文集」「新五子(稿)」「蕪翁句集」などの出典が記され一大事業であり、その原稿を積み上げると、子規の背丈ほどに達したという(左写真参照)。

当館が所蔵する一片の草稿もまた、子規の終わりのなき俳句研究の確かな足跡の一つである。本資料からは、俳句研究に臨む子規の実直さや緻密さ、多くの俳句と出会うよるこび、新しい俳句を生み出そうとする情熱や探究心など、かれの様々な思いを垣間見ることができると。



積み上げられた「俳句分類」の原稿